様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月２２日現在

機関番号：３２６３９
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2009～2010
課題番号：21830112
研究課題名（和文）「教師志望者における来歴の特性に関する実証的研究」

研究課題名（英文）An Empirical Study on the Background Characteristics of Teacher Applicants

研究代表者
太田　拓紀（OTA HIROKI）
玉川大学・教育学部・助教
研究者番号：30555298

研究成果の概要（和文）：
本研究は大学生の教師志望者における来歴の特徴を検証し、次世代の教師集団である彼らの社会的性格や文化的特性を分析した。その結果、出身階層や家庭環境以上に学校経験が教職選択に強い影響をもたらしており、なかでも学校でのリーダーの経験が教師志望者に顕著であったことが分かった。彼らは学校文化に規範的であるが故にそうした役割を担ったと考えられ、学校文化への強い同調に教職選択の潜在的要因が含まれていると分析した。

研究成果の概要（英文）：
The present study analyzed the social attributes and cultural traits of future teachers by examining the background characteristics of teacher applicants. Results of this study revealed that school experiences have a stronger influence on an individual’s choice with relation to the teaching profession than have class origin and family background. Moreover, many applicants had performed the role of class or school president during their student days. Therefore, it is presumed that they were elected to be leaders because they were highly disciplined in school and that strict conformity to school culture is a latent factor for becoming a teacher.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	680,000	204,000	884,000
2010 年度	550,000	165,000	715,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,230,000	369,000	1,599,000

研究分野：教育社会学
科研費の分科・細目：教育学・教育社会学
キーワード：教員養成・予期的社会化

１．研究開始当初の背景

精神疾患やバーンアウトの増加など、教師の勤務環境は切迫感を増している。さらには教師の問題行動、指導力不足などに対する外部のまなざしも厳しい状況にある。こうした現代に教師をめざすのはどのような若者たちであろうか。彼らの来歴には他の若者たちとくらべて、どのような特徴を見出すことができるのだろうか。

現在、大学における教員養成改革が進行しているが、十分な成果を挙げるためには、養成の対象となる教師志望者のそうした実態をまず把握する必要があると思われる。さらに、教師志望者のそれを明らかにすることは、次

世代の教師集団、教員文化のありようを予見することにもなると考えられる。

２．研究の目的

本研究の目的は、大学生の教師志望者における出身階層、出身地域、学校経験、家庭経験といった来歴の特性を実証的に明らかにすることにある。出身階層や生育環境による精神･態度形成への影響は広く指摘されており、教師志望者の来歴の検討によって、次世代の教員集団における社会的性格やハビトゥスの一端を描きだすことを目指した。

具体的には、質問紙調査による(1)教師志望学生とそれ以外の学生との来歴の比較、(2)教師志望の規定要因分析、インタビュー調査による(3)教師志望者のライフコース分析の３点を検証した。

３．研究の方法

本研究では主に、複数の大学における学生対象の質問紙調査を実施した。質問紙の配布、回収方法は調査の性質から、大学の授業の一部を利用した集合調査に拠っている。調査の結果はすみやかに集計して、統計解析ソフトのＳＰＳＳを用いてデータ分析を行った。分析はまず、教師志望者とそうでない学生との間において、来歴に関する変数の値の相違を検証している。ここではクロス表分析、分散分析を主に実施した。また、来歴に関わる複数の変数のうち、教師志望の判別力として何が強いのかといった、教師志望の規定要因を探るためのロジスティック回帰分析を行った。

また、質問紙調査を補うものとして、大学生対象のインタビュー調査も十数名実施している。

４．研究成果

(1) 得られたデータの詳細

本研究のデータは、2010 年 5～7 月に 11 大学（地域別：関東５・関西４・東海１・北陸１、設置者別：国立２・私立 9）で実施した大学生対象の質問紙調査（「大学生の教育に関わる経験と意識についての調査」）に基づいている。得られたサンプル数は 1922 名となった。希望職業が確定していた者は 1293 名であり、このうち分析の焦点となる教師志望者は、小学校 320 名(24.7%)、中学校 153 名（11.8%）、高校 238 名（18.4%）である。

また、延べ 15 名の教師志望者に対し、大学入学までのライフヒストリーについて、60～90 分程度のインタビューを行った。

(2)教師志望学生とそれ以外の学生との来歴の比較

まず、質問紙調査で得られたデータを用いて、教師志望者とその他の職業希望者の来歴について比較、分析した。出身階層については、教師志望の学生における父職＝教師の比率がやや高かった（表１）。次に、家族環境に関して、家族との教育・文化的経験（「親が勉強」「親が本」「家族と旅行」「家族と美術館・博物館」）の頻度について、教師志望者と他の職業志望者とを比べたが、有意差がなかった。また、習い事（「塾」「通信添削」「音楽」「スポーツ」「習字」「英会話」）の経験率については、特に小学校希望者において、スポーツがやや高く、塾が低い傾向がみられた（表２）。

次に小学校から高校に至るまでの学校での経験・活動について、教師志望者の特性を検討した。具体的な学校経験については複数の質問に対して因子分析を実施し、得られた４つの学校経験の因子得点平均値を算出した（表３）。その結果、教師志望者は「反規範的態度」因子に大差はなかったが、「示範的役割」「教師親和性」「向規範的態度」因子において、他の学生より有意に高い平均値を示した。また、部活動（中学時）の参加につい

表1：希望職業と出身階層（%）

	父親職業					
	教師	専門技術	事務管理	販売労務	その他	N
希望職業						
教師（小）	9.4	6.3	37.1	38.1	9.1	(318)
教師（中）	13.8	5.9	40.8	34.9	4.6	(152)
教師（高）	12.7	8.5	40.7	28.4	9.7	(236)
保育職	5.7	8.9	37.6	40.8	7.0	(157)
専門･技術	9.3	13.7	37.6	28.8	10.7	(205)
事務･管理	6.2	5.5	54.5	25.5	8.3	(145)
販売･労務	7.5	13.4	37.3	37.3	4.5	(67)

$\chi^2(24)=48.675$, $p<.01$

表2：希望職業と中学までの習い事（%，複数回答）

	学習塾	通信添削	音楽	スポーツ	習字	英会話	N
希望職業							
教師（小）	70.0	23.4	40.9	70.3	35.6	21.9	(320)
教師（中）	72.5	20.3	43.1	73.9	29.4	23.5	(153)
教師（高）	76.1	25.2	37.4	69.7	30.7	23.1	(238)
保育職	72.3	19.5	56.6	59.7	32.1	20.1	(159)
専門･技術	77.8	34.8	49.8	67.1	30.9	24.6	(207)
事務･管理	75.7	26.4	37.2	60.8	33.1	22.3	(148)
販売･労務	79.4	22.1	32.4	57.4	25.0	20.6	(68)

表3：希望職業と学校生活経験因子得点（平均値）

	示範的役割	教師親和性	反規範的態度	向規範的態度	N
希望職業					
教師（小）	0.12	0.14	0.05	0.07	(315)
教師（中）	0.25	0.14	−0.15	0.15	(151)
教師（高）	0.19	0.07	−0.07	0.12	(238)
保育職	−0.25	−0.07	0.10	−0.17	(157)
専門･技術	−0.12	−0.09	−0.05	−0.06	(199)
事務･管理	−0.18	−0.20	0.04	−0.09	(146)
販売･労務	−0.46	−0.33	0.16	−0.32	(66)
分散分析（F値）	10.84^{***}	5.77^{***}	2.17^{*}	4.17^{***}	

$^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$

ては、教師志望者における体育系の所属率がやや高かった（表４）。

表4：希望職業と中学時部活動所属率（%）

	体育系	文化系	所属なし	N
希望職業				
（小）	82.1	14.7	3.1	(319)
教師（中）	80.9	17.1	2.0	(152)
（高）	75.5	16.0	8.4	(237)
保育職	73.2	19.1	7.6	(157)
専門･技術	66.7	25.1	8.2	(207)
事務･管理	71.9	18.5	9.6	(146)
販売･労務	75.0	16.2	8.8	(68)

$\chi^2(12)=29.448$, $p<.01$

(3)教師志望の規定要因分析

続いて、出身階層、家族経験、学校経験など複数の要因のうち、教師志望の判別に影響をもつのは何かを明らかにするために、ロジスティック回帰分析を実施した（表５）。その結果、教師志望に対しては家庭教育よりも学校教育変数の判別力の強いことが明らかとなった。なかでも学校でのリーダー的役割が、教師志望に有意な大きな影響力をもっていた。また、学校段階別には、小・中学校の希望者が部活動、高校の希望者が学業成績において、教師志望の判別に有意な効果がみられた。

表5：学校段階別教職志望の多項ロジスティック回帰分析

		教師(小)	教師(中)	教師(高)
		b	*b*	*b*
基本属性				
性別	女性	0.04	−0.93 ***	−1.17 ***
学年（1.1年-4.4年以上）	（共変量）	−0.86 ***	−0.04	−0.26 **
出身階層				
父職	専門･技術	−0.04	0.09	0.40
（参照ｶﾃｺﾞﾘ：販売･労務）	事務･管理	−0.21	0.06	0.18
	その他	−0.05	−0.79 +	0.36
母職	専業主婦	0.06	0.17	0.12
家庭での教育・文化的経験(4段階)				
親が勉強教えてくれた	（共変量）	−0.02	−0.27 *	−0.03
親が本読んでくれた	（共変量）	−0.01	−0.07	0.05
家族と旅行	（共変量）	0.05	−0.02	−0.05
家族と文化的施設	（共変量）	−0.10	−0.08	−0.02
習い事の経験				
小ー中学時	学習塾	−0.38 *	−0.18	−0.01
	通信添削	−0.08	−0.44 +	0.00
	音楽	−0.35 +	0.16	−0.17
	スポーツ	0.31 +	0.35	0.15
	習字	0.24	−0.23	−0.02
	英会話	−0.03	0.14	0.07
学業成績				
中学３年時(5段階)	（共変量）	−0.12 +	0.12	0.16 *
学校生活経験（因子得点）				
示範的役割	（共変量）	0.29 **	0.41 **	0.42 ***
教師親密性	（共変量）	0.11	0.27 +	−0.01
反規範的態度	（共変量）	0.05	−0.14	−0.04
向規範的態度	（共変量）	0.16	0.21	0.24 *
部活動の所属				
中学時	体育系	0.97 *	1.39 *	−0.19
（参照ｶﾃｺﾞﾘ：所属なし）	文化系	0.74 +	1.47 *	−0.05
	定数	0.72	−1.57 +	−0.39
	χ^2		294.37 ***	
	df		69	
	Cox&Snell R^2		0.22	
	Nagelkerke R^2		0.23	
	n		1210	

+$p<.10$, *$p<.05$, **$p<.01$, ***$p<.001$

(4)教師志望者のライフコース分析

教師志望の大学生 15 名に対するインタビュー調査からは、教師志望に関わる具体的な予期的社会化作用が明らかとなった。とくに先の質問紙調査で顕著であった彼らの学校でのリーダー的な役割（学級委員、部長など）については、インタビュー調査対象者においてもその経験率は高かった。そして、そのリーダーの選抜過程では自ら進んで立候補するケースは決して多いとはいえず、教師や同級生に推薦されていた者が比較的目立った。彼らがリーダーに推薦された理由として、クラスの中でもきわめて学校文化に同調的であったためと考えられた。またそれ故に教師や他の級友からの推薦を固辞せずに、違和感なく受け入れていたと推測された。さらに、そうした役割を担うことで、要支援の子どもに対する支援を行うなど、教師役割を無意図的に経験する者も存在していた。

また、教師志望の契機として恩師の影響を挙げる者が多く、さらに恩師との教育経験が自らの職業的展望に連結していると考えられた。すなわち、恩師から強い影響を受けた志望者たちは、子どもと積極的な関わりを持とうとし、教師の子どもに対する教育的影響を高く評価する教職観を抱いていることが分かった。

(5)得られた成果の学術上の位置づけ

従来の教師の予期的社会化研究は、研究者の所属する教員養成大学の学生にサンプルが限定される傾向があった。周知のように開放制の教員養成制度においては、教員養成大学、教育学部以外の学生も重要な教員供給源であり、彼らを無視することはできない。また、先行研究の多くは教師志望者のみをサンプルにする場合が多く、非教師志望者との比較という視点が弱い。その意味で、非教員養成系を含む複数の大学で調査を実施した本研究は、教師の予期的社会化の全体像と特性を描きだす上で、大きな利点があったといえる。また、従来の予期的社会化研究では２変数間のクロス表分析がほとんどであったが、本研究では多変量解析を用いて、複数の要因から教師志望者の特質を検証している。これにより、教師の予期的社会化過程をより鮮明に浮き彫りにできたと考えている。

本研究では学校経験が教師の社会化過程に大きな意味を有すること、そのなかで教師志望者は学校文化にきわめて同調的であり、リーダー的役割を担う過程で教師への予期的社会化が強化される様子を実証的に示すことができた。つまり、主に大学入学以前の社会化過程に焦点づけたのであるが、この点を扱っ

た先行研究はきわめて少ない。その意味でも、教師の予期的社会化研究の新たな側面を開拓できたのではと思われる。

(6) 今後の展望

新たな成果の一部は現在投稿中であるが、今後２次分析を実施してさらに成果を充実させていきたい。また、教師志望者に顕著である学校文化に同調的な身体はいかにして形成されるのか。家庭教育、家庭環境など学校以外の要因をさらに詳細に検討したいと考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

１．太田拓紀，2011，「教職選択における重要な他者としての教師」玉川大学教育学部『論叢』2010，pp.67-81.［査読無］

〔学会発表〕（計２件）

１．太田拓紀，2010.10.24，「養成段階以前の教育経験にみる教師の予期的社会化における特性」関東教育学会第 58 回大会，聖徳大学（千葉県）

２．太田拓紀，2009.10.3，「教師志望者にみられる職業再生産の特性に関する研究」日本教師教育学会第 19 回研究大会，弘前大学（青森県）

６．研究組織

(1)研究代表者

太田　拓紀（OTA HIROKI）
玉川大学・教育学部・助教
研究者番号：30555298